

# 富岡重憲コレクションの古代エジプト資料、葬送用櫃について

## Funerary Box at the Aizu Museum

福田 莉 紗

### はじめに

早稲田大学會津八一記念博物館の富岡重憲コレクションには7点の古代エジプトの資料が含まれており、『早稲田大学會津八一記念博物館研究紀要』第18号でその概要が紹介された（近藤他 2017）。これらの資料は出土コンテクストが不明であり、来歴も不明瞭な点が多いために一部の資料については所見を述べるに留まっている。本稿ではこれらの資料の一つ、葬送用櫃<sup>(註1)</sup>について類例や細部の観察からより詳細な年代や用途について検討を試みる。

### 1. 富岡重憲コレクションの葬送用櫃の概要

本資料（**図1**）については、近藤らによって次のように報告されている（近藤 2017）。時代は末期王朝時代～プトレマイオス朝時代（紀元前664～紀元前30年頃）<sup>(註2)</sup>と推定されている。出土地は不明である。木製で彩色が施されている。寸法は総高65.5cm、幅20cm、奥行24.5cmである。用途は形式と寸法から、シャブティ箱<sup>(註3)</sup>、あるいはホルスの4人の息子たちの像を収納した櫃であるとされている。主な図像についても解説されているが、以下の観察所見と重複する部分があるため割愛する。本稿では後述する類例と比較するため、形式と図像について詳細に観察する。櫃は本体と蓋とで構成されている。

蓋には頭上に羽飾りを有する隼の姿をした冥界の神ソカルの像が据えられている。羽飾りの彩色は失われているが、その他の部分には鮮明に残存している。頬と口に金色が施されているのが特徴的である。隼の胸部にはウセクと呼ばれる複数列にビーズを構成して編み上げた襟飾り、背部にはこの首飾りの錘となるメニトが描かれている。蓋自体はわずかにボールト状を呈している。蓋は正面と背面の側板に載せるように成形されている。

本体の正面にはパレスファサードと呼ばれる古代エジプトの伝統的な模様を配した上に観音開きの扉が描かれている。ブロバースキ（Brovarski, E.）によれば、これは「天空の扉」と呼ばれるもので、死者が死後に自身の家からナイル川を渡って最初に到着するミイラ製作所の入り口を表しているという（Brovarski 1977: 107-108, Chapman 2016: 14-23）。天空の扉の上には穀竿と扇を手にしたアヌビス神が座している。両側面にはパレスファサードの上に立つホルスの4人の息子が2柱ずつ、正面に顔を向けて描かれている。右側面は人頭のイムセティ神と犬頭のドゥアムトエフ神、左側面は猿頭のハピ神と隼頭のケベフネセヌエフ神の図像である。背面にはアテフ冠を戴き、穀竿とヘカ笏を手にする擬人化されたジェド柱が同じくパレスファサードの上に描かれている。なお、正面と背面の板の上部内側には蓋を固定するためと思われる柄穴が1つずつ穿たれている。四隅の支柱には黒い波線が書かれている。

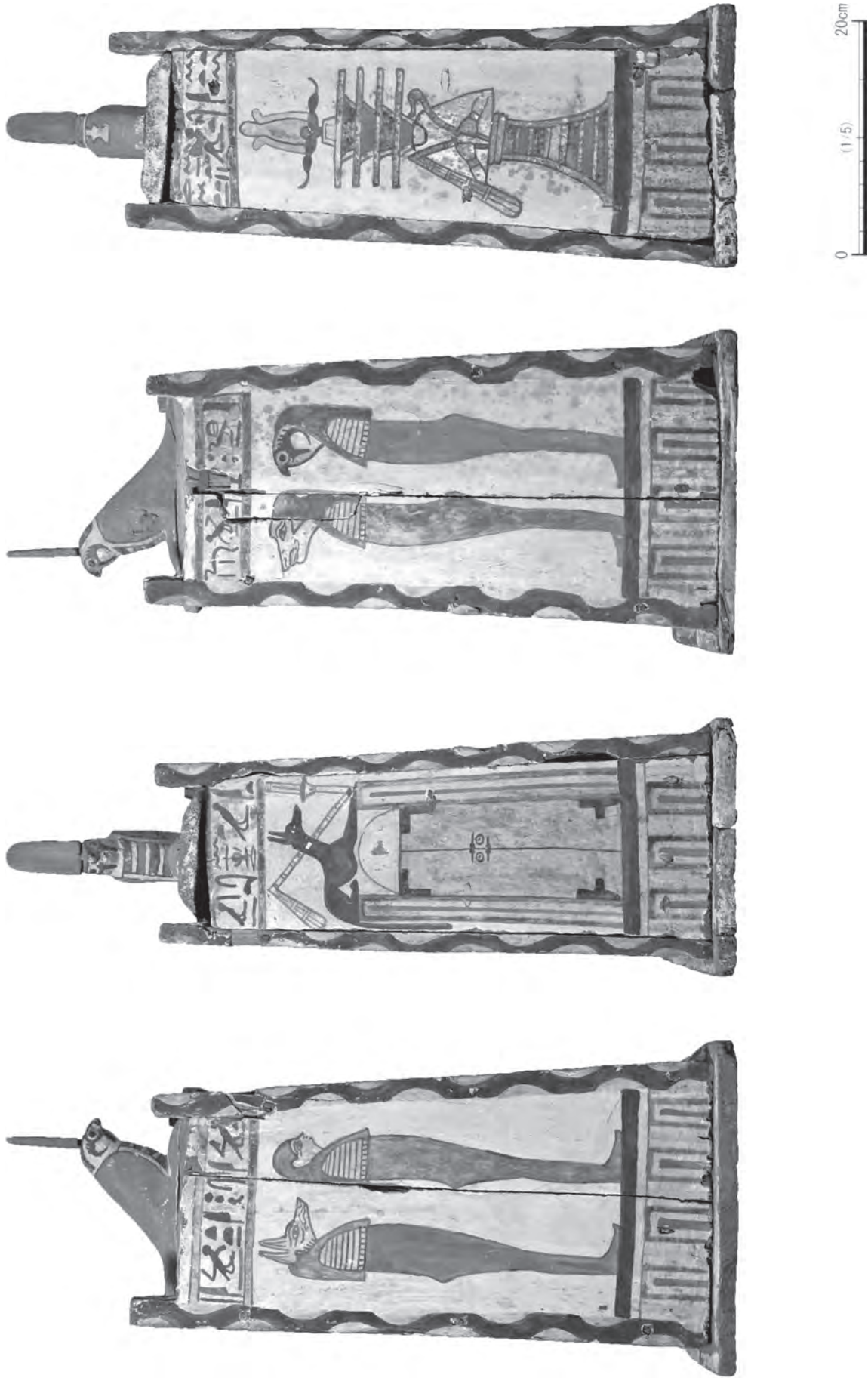


図1 富岡重憲コレクションの葬送用櫃

## 2. 類例

富岡コレクションの葬送用櫃の類例はこれまでに以下の通り2点確認している。

### ① 古代エジプト美術館所蔵品<sup>(註4)</sup>

本資料(図2)は、『ミイラと神々 エジプトの来世、メソポタミアの現世』に詳細が記載されている(四角、須藤編 2019: 68, 138)。本資料はカノポス箱もしくはシャブティ箱として考えられており、年代は末期王朝時代からプトレマイオス朝時代と推測されている。出土地は不明である。木製で彩色が施されている。本資料の寸法は総高49.5cm、幅20cm、奥行28.3cmである。富岡コレクションの葬送用櫃と同様、蓋と本体で構成されている。

蓋には隼の姿をしたソカル神が据えられている。頭部には飾りを取り付ける柄穴が穿たれているが、頭飾りは欠損している。胸部にはペクトラルと呼ばれる胸飾りを有する。ペクトラルは祠堂型で、ジェド柱を挟んで2匹の蛇が対称に描かれている。背面にはメニトと思われる図像が描かれているが、錘としての役割は担っておらず形状も歪であることから製作者が意図を理解せずに描いた可能性がある。蓋は四隅の支柱部分を避けて、全ての側板に載せられるように成形されている。右側面と左側面の側板上には蓋を固定するためのものと思われる柄穴がそれぞれ2つずつ穿たれている。

本体の正面には富岡コレクションの資料と同様に天空の扉が描かれており、その上にはアヌビス神が座しているが、手には何も有していない。両側面にはホルスの4人の息子が2柱ずつ描かれている。右側面は猿頭のハピ神と犬頭のドゥアムトエフ神が背面に顔を向け、左側面は人頭のイムセティ神と隼頭のケベフネセヌエフ神が正面に顔を向けて立っている。ホルスの4人の息子の下には水色で塗色されただけの空間が配置されている。背面にはアテフ冠を戴いたジェド柱が描かれており、下部には同じく水色で塗色されただけの空間がある。本資料には銘文が一切記されておらず、全ての側板の上部には天空の標章であるベトが描かれている。四隅の支柱は黒地に波線を破線にしたような白い模様が描かれている。

### ② ウォルターズ美術館所蔵品<sup>(註5)</sup>

アメリカのウォルターズ美術館(The Walters Art Museum)にも類例が所蔵されている。本館ウェブサイト上のコレクションデータベースには、本資料に関して以下の情報が記載されている<sup>(註6)</sup>。カノポス箱もしくはシャブティ箱として考えられており、年代は第三中間期(紀元前1068~655年頃)と推測されている。出土地は不明である。木製で彩色が施されている。本資料の寸法は総高41cm、幅20cm、奥行27cmである。残念ながら蓋は欠損している。

本体の正面には前述の2例と同様に天空の扉が描かれており、その上にはアヌビス神が座している。アヌビス神が殻笏と扇を手に行っているのは富岡コレクションの資料と同様である。両側面にはホルスの4人の息子が2柱ずつ描かれている。右側面は人頭のイムセティ神と犬頭のドゥアムトエフ神が、左側面は猿頭のハピ神と隼頭のケベフネセヌエフ神がそれぞれ正面に顔を向けてパレスファサードの上に立っている。両側面の上部はボールト状に成形されているのが特徴的である。背面にはアテフ冠を戴き、殻笏とヘカ笏を手にする擬人化されたジェド柱が同じくパレスファサードの上に描かれている。両脇には右にネフティス女神、左にイシス女神がジェド柱に礼拝している姿が表現されている。本資料には全ての側板の上部に天空の標章であるベトが描かれており、これは古代エジプト美術館の資料と同様である。四隅の支柱には黒い波線が書かれている。

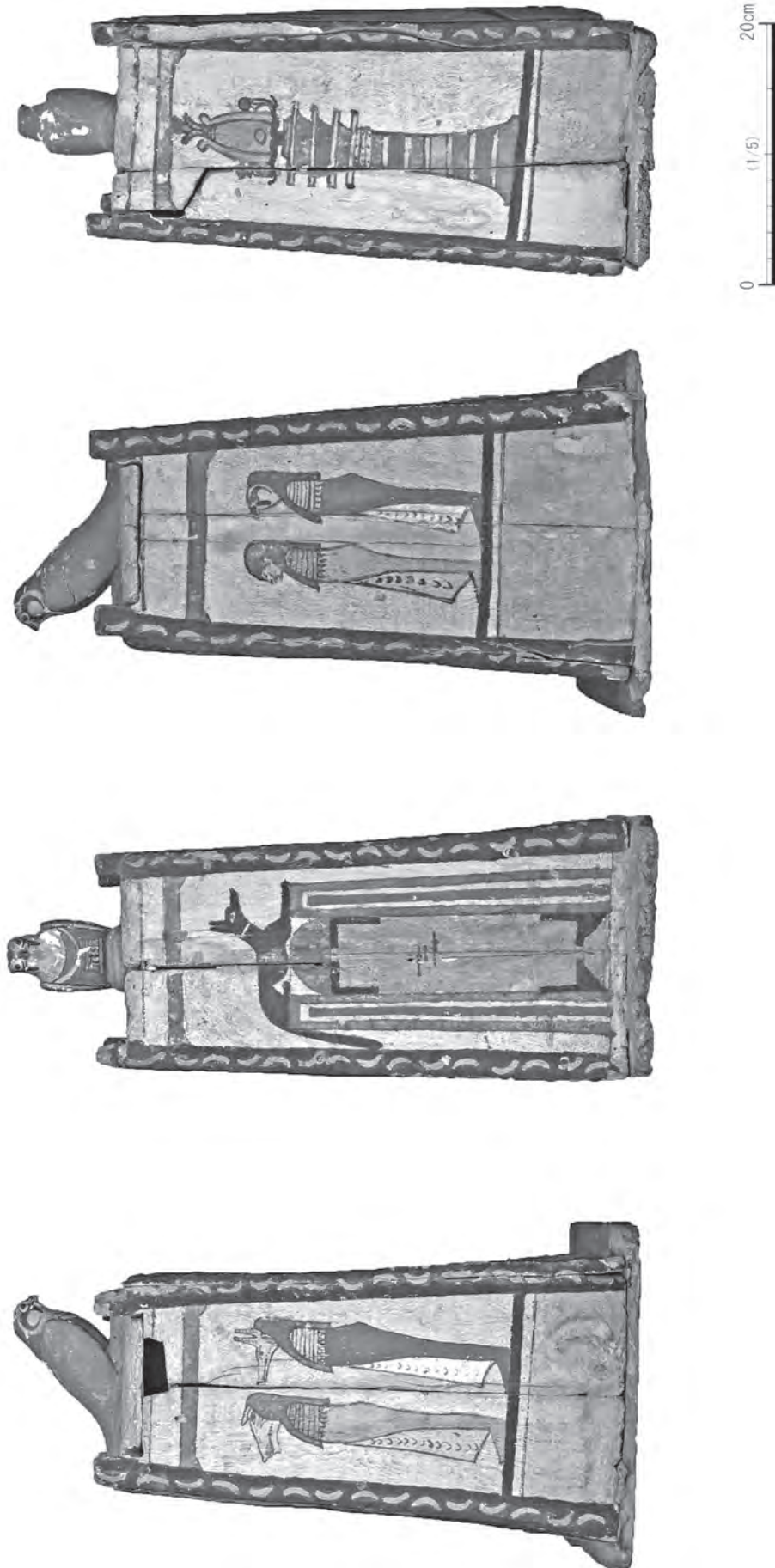


図2 古代エジプト美術館所蔵品

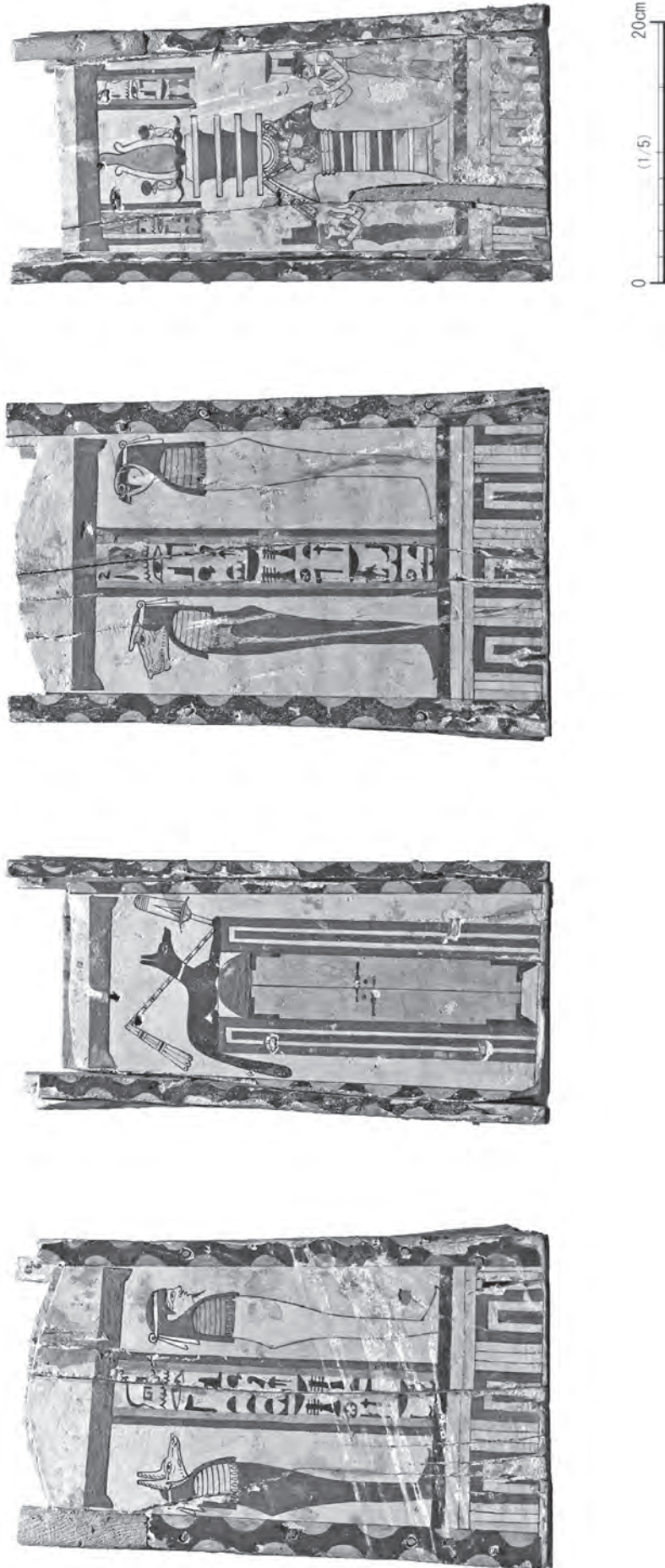


図3 ウォルターズ美術館所蔵品

### 3. 形状から考える年代観

上記3つの資料は、細部に差異が認められるものの、形状や図像は概ね同様でありほぼ同年代に製作されたものであると考えられる。しかし、各資料の年代観は第三中間期からプトレマイオス朝までと幅が広い。年代決定を阻んでいるのは、これらの資料の用途が確認されておらず、類例も僅かであることが一つの原因であると思われる。

ところが、形状に注目すると年代観が見えてくる。富岡コレクション所蔵品と古代エジプト美術館所蔵品は蓋がボルト状もしくは両端が丸みを帯びており、ウォルター美術館は両側面の上部がボルト状を呈している。また3点ともに、四隅に支柱状の木材が据えられている。この形状はポストと呼ばれる四隅に据えられた4本の柱と、ボルト状の蓋を有する第25～26王朝（紀元前722～525年）に使用されていた長方形に成形された木製の外棺であるケレスウ (*qrsu*) 棺の特徴 (Aston 2009: 284, Niwinski 1983: 449) と一致する (図4)。また、ケレスウ棺にはしばしば隼形の木製彫像が取り付けられていることがある。富岡コレクション、そして古代エジプト美術館の所蔵品の蓋にも隼像が取り付けられていることから、ケレスウ棺からの影響が窺える。

ケレスウ棺と同時代のシャブティ箱も同様の形状が採用されている (Aston 1994: 36-37)。ただし、ケレスウ棺とケレスウ棺形のシャブティ箱が横長であるのに対し、本稿で取り上げた3つの資料は縦長であり、両者が同時代のものであるとは考えづらい。よって本稿の対象資料は、ケレスウ棺やケレスウ棺形シャブティ箱が消失する、第26王朝（紀元前664～525年）以降に出現したものであると推定する。

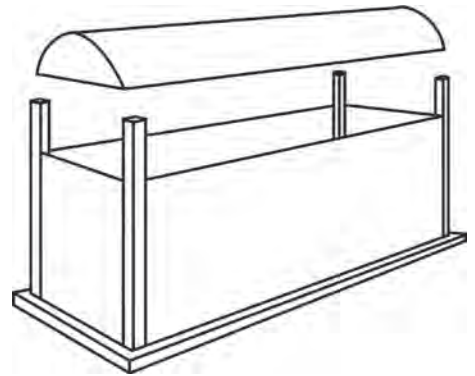


図4 ケレスウ棺模式図

### 4. 図像と銘文から考える用途と年代観

#### 4-1. 用途

前述の通り、類例を含む3点の資料の用途として想定されているのは、シャブティ箱、カノポス箱、ホルスの4人の息子の像を納めた箱と多岐にわたる。第三中間期以降の鳥のミイラを納めた箱などを含めた箱の類はそれぞれ混同されることが多々ある (Budka et al. 2012: 235)。これは当該時代のこれらの資料の研究が未発達であり、外観も近似していることが原因であると思われる。

年代観の一指標となったケレスウ棺およびケレスウ棺形のシャブティ箱との形状の類似性から考えると、シャブティ箱は有力な用途として考えられるであろう。しかしながら、図像と銘文に着目すると必ずしもそうではないことが明らかになった。

第21～25王朝が区分される第三中間期におけるシャブティ箱の装飾は、図像が描かれることはほとんどなく、「シャブティ・テキスト」とも称される死者の書第6章や、ヘテプ・ディ・ネスウ (*htp di nsw*) 定型文といった銘文が記されることが伝統的である (Aston 1994: 38)。本稿で対象としている資料のように、全側面に図像が施されているものはない。また第26王朝の中途である紀元前7世紀以後には、シャブティを納めることを目的として特別に設えたシャブティ箱は確認されなくなる (Aston 1994: 44)。よって、形状から推定された年代観では、本稿で対象としている資料をシャブティ箱とみなすことは難しい。

一方でカノポス箱の図像とは大部分が合致する。カノポス箱については、アストンによって第三中間期以降の資料を対象に、形状を基準に分類されている (Aston 2000)。これを参考にすると、シャブティ箱が盛んに用いられるようになる紀元前7世紀以降、カノポス箱にホルスの4人の息子が描かれるのは一般的になっている。これはプ

トレマイオス朝まで継続している。元来ホルスの4人の息子はミイラ製作と非常に結びつきが強い。カノポス壺の蓋に表現されているほか、ミイラ製作の材料であるナトロンや布を収蔵していたアンフォラには、ホルスの4人の息子の名を冠した材料名が記されている例も末期王朝時代のミイラ製作が行われたカッシュェで確認されている (Janák and Landgráfová 2011: 33-34)。

また、アストンの集成ではすでに紀元前900年頃からカノポス箱には天空の扉の図像が登場し、その後プトレマイオス朝に至るまで一般的な図像として描かれている。天空の扉は、ミイラ製作所の入り口を象徴しているということは前述の通りである。カノポス箱は、ミイラ処理の際に摘出した内臓をカノポス壺に納め、そのカノポス壺をさらに収納するための箱である。内臓の摘出、つまりカノポス壺あるいはカノポス箱が必要になるのはミイラ製作所内での作業であるため、カノポス箱に天空の扉が描かれることに合点がいく。

この他にも、ジェド柱やアヌビス神、パレスファサードの図像も末期王朝時代からプトレマイオス朝時代のカノポス箱に頻出する。特にホルスの4人の息子とミイラ製作との関係性の強さに注目し、共に描かれることが多いこれらの図像がカノポス箱に特徴的なものであることは、ブドカ (Budka, J.) らによっても主張されている (Budka et al. 2012: 234-235)。

このように他のカノポス箱との類似点はあるものの、残念ながら上記のアストンによるカノポス箱の集成および分類研究には本稿で対象資料としている葬送用櫃に合致するものは言及されていない。

カノポス箱であると想定した際に問題となるのは対象資料のサイズである。カノポス壺を収容するには過小だからである。しかし、末期王朝時代以降は必ずしもカノポス壺を使用していたわけではないという指摘もある (Aston 2000: 166他)。実際、サッカーで出土した第26王朝に年代づけられているカノポス箱にはカノポス壺が納められておらず、リネンの包みが収納されていた。リネンの中にはミイラ製作に使用されるナトロンと推測される白い物質が入っており、さらにその中には内臓が納められている可能性も提示されている (Smythe 2008: Cat. no.13)。

以上の点から、本稿の対象資料がカノポス箱として使用された可能性も高いと言える。しかしながら、古代エジプト人でさえもカノポス箱にシャブティを納めていた例も確認されており、当時から混同して使用していた事実もある (Aston 2000: 171)。出土コンテクストが失われた以上、製作時点で目的としていた用途は推定できても、実際にはいかに利用されたのかを確定することはできない。よって、本稿ではカノポス箱の可能性も十分にある、という結論を提示したい。

#### 4-2. 年代観

ケレスウ棺形に近似した形状から第26王朝以降に出現するという年代観を提示したが、図像の細部を観察した結果からも追認できる。富岡コレクションの葬送用櫃の蓋に取り付けられた隼像には、ウセクと呼ばれる襟飾りが描かれている。本来、ウセクは人間でいえば首元から胸部上部までの幅を持つ装飾品である。しかし、本資料に描かれたウセクは腹部までU字型に垂れ下がっている。古代エジプトでは両者共にウセクと呼ばれているが、研究者によっては「U字型襟飾り」として区別することもある。U字型襟飾りが一般的に用いられるようになるのはグレコ・ローマン時代 (紀元前332～紀元後395年) 以降である (Riggs 2001: 59)。しかしU字型襟飾りに類似した図像表現は、既に第26～27王朝の木棺に描かれている<sup>(註7)</sup>。また、四隅に据えられたポストには、全対象資料に共通して波線が表現されている。これは蛇が形骸化したものではないかと考える。U字型襟飾りに類似した図像表現を有する棺と同時代には、棺の側面に肩部から足元まで波打った蛇が描かれることがある<sup>(註8)</sup>。これらの図像からも、本稿の対象資料は第26～27王朝が出現年代として推定できる。

消失時期としては、天空の扉の図像が判断基準になると考えられる。アストンの研究によると、天空の扉が前面全体に描かれるものから、前面を上下二段構成としてどちらかに天空の扉が描かれるものへと変移する。後者は紀元前4世紀終わりから紀元前3世紀にかけて登場すると指摘している (Aston 2000: 171-173)。類例を含む3点の対象資料は、全てにおいて天空の扉が前面の全体に描出されている。よって、消失時期は紀元前4世紀頃の第30王朝頃であると考えられる。

## まとめ

富岡コレクションの葬送用櫃は、これまでに2つの類例を確認することができた。しかしこれら3点は出土コンテキストが失われているため、その年代観やコンテキストは不明であった。本稿で形状や図像を分析した結果、第26～30王朝の期間にカノポス箱として使用されていた可能性が高いと結論付けた。この時代は埋葬事例の発見が他の時代と比較すると少なく、研究が未発達である。今後、さらなる類例の発見や研究の進展によって本資料に関するより詳細なデータが得られることを期待したい。

## 謝辞

本稿を執筆するにあたり、早稲田大学文学研究院教授・近藤二郎先生、金沢大学資料館副館長・河合望先生にご教示いただいた。また、資料調査にあたっては古代エジプト美術館オーナー・菊川匡先生、會津八一記念博物館主任研究員・下野玲子先生、會津八一記念博物館助手・石井友菜氏にご協力賜った。末筆ではございますが、ここに記し深く感謝申し上げます。

## 註

- (1) 本資料のIDは「彫E-6」である。
- (2) 本稿における古代王朝時代の年代は Warburton, D.A. (eds.), *Ancient Egyptian Chronology*, pp.473-498. Leiden. に依拠している。
- (3) シャブティ箱とは、冥界で主人のために奉仕する召使の像であるシャブティを納めた箱である。副葬品として墓に埋葬される。ケレスウ棺形のシャブティ箱は、アストンの分類では Type VIII に分類されている。
- (4) 本資料の収蔵番号は2017.0001である。
- (5) 本資料の収蔵番号は62.6である。
- (6) The Walters Art Museum のオンラインコレクション (<https://art.thewalters.org/detail/2451/box-for-ushabtis-or-canopic-jars/> 最終閲覧日2021年1月6日) を参照した。
- (7) ヒルデスハイム博物館の所蔵番号 PM1953、レーマー・ペリツェウス博物館の所蔵番号1954、美術史美術館 (ウィーン) の所蔵番号7497が例として挙げられる。資料の年代はゲッセラー・ローの研究に依拠している (Gessler-Löhr 2017)。
- (8) ヒルデスハイム博物館の所蔵番号 PM1953、レーマー・ペリツェウス博物館の所蔵番号1954、美術史美術館 (ウィーン) の所蔵番号 ÄS9080が例として挙げられる。資料の年代はゲッセラー・ローの研究に依拠している (Gessler-Löhr 2017)。

## 引用参考文献

- Aston, David A. 1994 'The Shabti Box, A Typological Study', *OMRO* 74, pp. 21-54.  
 2000 'Canopic Chests from the Twenty-first Dynasty to the Ptolemaic Period' *Ägypten Und Levante / Egypt and the Levant*, vol. 10, pp. 159-178.  
 2009 *Burial Assemblages of Dynasty 21-25*, Wien.
- Brovarski, E. 1977 'The Doors of Heaven', *Orientalia*, 46(1), nova series, pp. 107-115.
- Chapman, S. L. 2016 *The Embalming Ritual of Late Period through Ptolemaic Egypt*, Ph. D., Birmingham.
- Gessler-Löhr, B. 2017 'Eine Gruppe Spätzeitlicher Mumienärgere aus el-Hibeh', in Kóthay, K. A. (eds.) 2016. *Burial and Motuary Practices in Late Period and Greco-Roman Egypt*, Budapest. pp. 195-240.



- Janák J. and Landgráfová R. 2011 'New Evidence on the Mummification Process in the Late Period', in Bárta, M., Coppens, F. and Krejčí, J. (eds.) 2011 *Abusir and Saqqara in the year 2010*. Prague. pp. 30-45.
- Niwinski, A. 1983 'Sarg. NR-SpZt', *LÄ* 5, pp. 434-467.
- Riggs, C. 2001 'Forms of the Wesekh Collar in Funerary Art of the Greco-Roman Period', *Chronique d'Égypte*, Vol. 76, Issue 151-152, pp. 57-68.
- Smythe, J. 2008 *CORROBOREE: 25 Years of Cooperation between Egyptians and Australians in the Field of Egyptology*, Cairo.
- 近藤二郎、河合望、平原信崇 2017 「富岡重憲コレクションの古代エジプト資料」『早稲田大学會津八一記念博物館 研究紀要』第18号

#### 図版出典

- 図1 近藤他 2017 写真6
- 図2 古代エジプト美術館撮影（筆者により一部改変）
- 図3 ウォルターズ美術館撮影（<https://art.thewalters.org/detail/2451/box-for-ushabtis-or-canopic-jars/>）（筆者により一部改変）
- 図4 筆者作成

